

絵

今号の表紙の写真は、葛飾北斎の肉筆画「糸瓜に雀」のまねをしようと思ひ、撮った写真である。

この絵は長い間、私の頭の中にあつた。私が中学生の時、大和デパート小売部パートの浮世絵展で見た。浮世絵展で肉筆は少ない。左上に鳥、右下にへちま。飛んでいた鳥が身をひるがえし、へちまの一点を凝視している。恐らく虫などを発見したのだろう。鳥の動かない黒い目。見えない獲物までは何も描かれていない。この緊迫した空間に衝撃を受けた。あきらかに北斎はこの「間」を描いているのだ。私が最初に強い印象を受けた絵だと思ふ。

最近「北斎肉筆画の世界」という図録を買った。それでこの絵の題名が分かった。署名と印章から1801年から1813年頃の作であるらしい。北斎は生涯で100回以上の引越して知られているが、10年に1回くらい雅号と印を変えている。この絵は「北斎」の号である。50歳前後の作であろうか。

もちろんこの写真は、へちまの花であ

る以外なにも似ていない。空間を写す事は並みの業ではない。

映画

ついでに初めて強い印象を受けた映画について。

私はその映画を西堀のライブで見た。ジョン・ギラーミン監督「かもめの城」だ。中学生だった私は、この映画や監督について何の知識があつたわけではない。

ライブは画面が小さいが、値段が安いので良く見た。新潟最大の映画館、グラント劇場が800円位で、ライブは300円位だった記憶がある。実は他の映画はほとんど覚えていないのだが、この映画には鮮烈な印象がある。なにより主人公の少女が当時の私と同じ、15歳のパトリシア・ゴッチだ。彼女はこのほか「シベールの日曜日」で助演した以外、日本ではあまり知られていないフランスの女優だ。

また監督ギラーミンはイギリス人でアクション映画中心の監督だ。「タワーリンググインフェルノ」「キングコング」などを

撮っている。

物語はフランス。海の近くの農場に暮らす都会からやってきたらしい父と、少女とその姉。そこに脱獄囚の青年が迷い込む。少女は青年をかくまうことになる。「かもめの城」とは少女が時を過ごす海辺の洞窟の事だ。

当時私は、学校が終わると毎日海沿いを、時間をつぶしながら歩いて帰っていた。もちろん新潟の海に洞窟はないが、テトラポットを伝いながら、その隙間のカニなどを探して歩いていた。

小説

つづいて初めて感銘を受けた小説について。

その前に私が文学に親しむようになったのは、新大付属小学校高学年の時、担任の松木先生のお陰だと思ふ。松木先生は国語の先生で、名を左衛門五郎と言つた。最初に先生が教室に連れられ、名を「松木左衛門五郎」と名乗った時は、私達はその時代劇のような名にどっと笑つた。

この先生が授業で芥川龍之介の短編を読んできた。「杜子春」「蜘蛛の糸」「粥」

は鮮明に覚えていて。杜子春が地獄で責め苦に会う時、蜘蛛の糸が切れそうになる時、芋粥をいかにもうまそうにする時、子供達は目を丸くして聞いていたと思ふ。

その後中学校に行き文庫本を自分で買うようになった。ロマン・ロランやヘルマン・ヘッセなど翻訳小説ばかりだったが、中でもパール・バックの「大地」に最も心を動かされた。

パール・バックは生後3カ月で、宣教師の父につれられ中国に渡つたアメリカ人女性だ。「大地」は3部作からなる長編で、清朝末期から中華民国に至る激動の時代、王家3代の物語である。

貧農の王龍は奴隷の女、阿蘭を妻として娶る。2人は懸命に働き、少しずつ地

鈴木英介



所を増やしていく。ある程度生活の目途が付いた時、王龍は茶屋に行く。その茶屋は王龍が長い間、遠くから見、通りすがりに見ていた村の一軒だけの茶屋だ。一大決心をしてそこに入り、座つた時、女が近づいて言う。「何にしますか？」その時まで王龍は入つてからどうするか全く考えていなかったのだ。そのような事を聞かれるとさえ思わなかった。

「・・・茶」王龍がかるうじて言う。長い間がある。すると女は大きな葉が一枚だけ入つた碗を持つてくる。それは王龍が生まれて初めて飲む茶だ。茶を飲み終わると王龍は金を払い茶屋を出る。後ろで何か声がするが王龍の耳には入らない。実はそこでは2階で売春が行われていて、客は1階で何かを注文して2階へ行くようになっていた。

王龍がそれで満足したのか、不満であつたのかは語れない。

この小説は初代王龍の物語、その子、さらにその子の物語へと続く。

音楽

私が音楽に親しむようになったのは、この時代からはるかに時がたつている。

学校では音楽の授業があり、楽器なども習つた。かつらを被つた西洋人の肖像画に囲まれた音楽室で1時間音楽を聴く機会もあつた。それは皆、交響曲だった。その様な大きな複雑な曲は、子供には理解できないのではないだろうか。少なくとも私は好きにはなれなかった。

最初に感銘を受けた音楽は、シヨパンのピアノ曲だ。中でも24の前奏曲が好きだ。それをマルタ・アルゲリッチのテープで聞いた。ウォークマンが発売され、音楽に無知だった私も流行に乗って買ってしまった。耳にイヤホーンを突っ込み、直接頭の中で聞く音楽は衝撃だった。これが交響曲だったら好きになれなかったかもしれない。

この前奏曲だが、何かの前奏曲ではない。単独の曲だ。一つ一つはとても短い。30秒位の曲も多い。このアルゲリッチ版では一番長い15番変ニ長調で4分51秒だ。この最後の24番ニ短調は二の音が銃弾のように打たれる。そして音が消える。無音。

この時シヨパンの故国ポーランドは、ロシアの侵略を受け消滅した。フランスに居たシヨパンは二度と故国に帰ることはなかった。